

令和 7 年 7 月 宝塚市長定例記者会見

日 時 7 月 23 日(水) 15 時 00 分から 場 所 特別会議室

出席者(市) 市長、副市長、企画経営部長、企画経営部総括担当、政策推進担当及び秘書・広報担当次長、企画経営部政策推進担当課長、企画経営部市立病院経営改革担当部長、企画経営部市立病院経営改革担当次長、企画経営部市立病院経営改革担当課長、管理部長、学校教育部総括担当及び学校教育担当次長、スポーツ振興課長、学校教育課副課長

出席者(ゲスト) パナソニック ホームズ株式会社 担当者

出席者(記者クラブ) 神戸新聞社、産経新聞社、毎日新聞社、読売新聞社

1 発表案件

(1) 公民連携による「中山台ニュータウン」再生事業を推進します

(企画政策課)

【質疑】

(記者) 昭和 45 年から中山台ニュータウンの開発が始まったのでしょうか

(ゲスト) いえ、昭和 45 年に入居が始まりました

(記者) 開発については(株)クラレによって進められたという認識で間違いないでしょうか

(ゲスト) はい、当初はそうです

(記者) 現在の人口は約 1 万 2 千人ということですが、ピーク時の人数と時期を教えてください

(担当) 現存する統計人口データは平成 7 年以降のものとなっており、最大値は平成 7 年の 1 万 6 千人です。平成 6 年以前については、地区ごとの内訳がないため把握できません

(記者) (株)クラレから「全施設と用地」を購入されたということですが、これは資料に記載されているファミリーセンターやスポーツプラザなど計 9 つの施設のことで間違いないでしょうか

(ゲスト) はい、そのとおりです

(記者) その全施設と用地の総面積は 31,265 m²ということですが、これは土地の面積でしょうか

(ゲスト) はい、そのとおりです

(記者) 戸建て賃貸住宅は何戸あるのでしょうか

(ゲスト) 12戸です

(記者) 一般的な2階建ての造りでしょうか

(ゲスト) はい、一般的な2階建ての木造住宅です

(記者) 今後の整備について、ファミリーセンターを中心に活性化していくというお考えでしょうか

(ゲスト) はい、そのとおりです

(記者) 戸建て賃貸住宅について、これまでと同様に、賃貸という形で運用していくのでしょうか

(ゲスト) 需要がある限りは賃貸という形で進めていきたいと考えています

(記者) 将来的には、ショッピングセンターのリニューアルを通じて、買い物に関する課題の解決を図るとのことでしたが、その中で移動手段に関する課題も出てくると思います。その課題に対して、どのような対策をお考えでしょうか

(ゲスト) 現在も「買い物バス」が運行されており、買い物専用の移動手段として機能しています。今後はこれを発展させ、ライドシェアやAIデマンドバスなどの導入が可能かどうか、現在検証を進めているところです

(記者) 自動運転が実装されることもあり得るのでしょうか

(ゲスト) 今のところ、そこまでの予定はありません

(記者) パナソニックホームズ(株)が、ニュータウンの再生事業に取り組まれるのは今回が初めてでしょうか

(ゲスト) はい、そうです

(記者) 会社として、今回の取り組みを皮切りに、今後さまざまなニュータウンの再生に取り組んでいこうとお考えでしょうか

(ゲスト) 私たちは、社会課題の解決型のまちづくりを目指しており、特に社会課題が集中的に存在するのがニュータウンであると考えています。したがって、ニュータウンを中心としながらも、さまざまな地域で課題を抱える自治体に対しても取り組んでいきたいと考えています

(記者) 企業としては、当然ながら収益の確保も必要かと思いますが、社会課題の解決によって、中山台が良い場所だと評価されれば、建て替えなども進み、会社としての利益にもつながるといった狙いもあるのでしょうか

(ゲスト) もちろん企業として利益は必要ですが、それが第一の目的ではありません。社会課題の解決によって、人が集まる場所をつくることができれば、それ自体が事業として成り立ちます。まずはこの地域に取り組み、人が集まる場所へと再

生していくことが優先だと考えています

(記者) 全国にニュータウンがある中で、中山台を選んだ理由は何でしょうか

(ゲスト) さまざまな条件が合致したという点もありますが、一番の要因はやはり「宝塚市」という地名の認知度です。宝塚市というと、全国的な認知度がありますので、その点で非常に大きなメリットがあると感じています

(記者) この取り組みをスタートさせるにあたって、市としてのコメントをお願いします

(市長) まず、宝塚市を選んでいただいたことを大変光栄に思っています。この中山台ニュータウンは、私たちもポテンシャルの高い場所だと認識しており、こうして選定いただいたことを嬉しく思います。市としては適切な距離を保ちながら、連携できる部分では連携し、単に住民の皆さんが生涯暮らせるまちを目指すだけでなく、ニュータウンの新しい形と一緒に模索しながら、新しいモデルづくりを進めていければと考えています

(記者) 連携協定を結ぶ予定はあるのでしょうか

(市長) はい、その予定で進めています

(記者) 時期はいつ頃の予定でしょうか

(担当) 現段階では未定です

(記者) 市としてできることにはどのような内容があるのでしょうか

(市長) 地域にはまちづくり協議会や自治会など、住民の皆さんとのネットワークがあります。これまで築いてきた関係性や、各種規制の調整など、市が担える部分は多くあります。民間企業が担う部分と、市が担える部分を持ち寄って、住民の暮らしを支える形を目指していきたいと考えています

(記者) 先ほどの市長のコメントの中で「適切な距離を保つ」という発言がありましたが、具体的にどういう意味合いでしょうか

(市長) 市は行政機関なので、民間企業との関係においては、節度をもった連携が必要だと考えています。一方で、できる限り一緒に新たなモデルを作っていきたいという思いもありますので、過度に密接な関係になるのではなく、節度を持ってウィンウィンの関係性を築いていければと考えています

(記者) 資料に「まちのプロデューサー」とありますが、これはパナソニック ホームズ(株)の担当者が務めるのでしょうか

(ゲスト) いえ、「エリアプラットフォーム」を構築し、その中で「エリアマネジメント組織」を設立し、公民連携でお困りごとを解決する役割を担う人材を発掘・育成できればと考えています

（記者）つまり、プラットフォームに参画する企業や団体、住民の方が務めるという理解でよろしいでしょうか

（ゲスト）はい、そのとおりです。私たちが直接行うのではなく、地元の方々が主体となって取り組むことで、持続可能なまちづくりを実現していきたいと考えており、私たちはその支援役として関わっていきます

（記者）今回のニュータウン再生事業は、市長の公約において、どの程度の優先順位で位置づけられているのでしょうか

（市長）「暮らしを支えるまち」という公約を掲げた段階ではパナソニック ホームズ（株）との話はありませんでしたが、市としてできることを考えていた中で、このような話をいただき、いい機会だと思いました。私たちの考えとパナソニックホームズ(株)の考えを擦り合わせ、地域の皆さんが中心となって一緒に取り組んでいくことで、よりバージョンアップした暮らしを支えるまちの実現に向けて、いい形で発展できると考えています

（次頁あり）

(2) 医療・福祉・介護・保健に係る「たからづかモデル」の検討開始と
懇話会の市民公募委員を募集

(企画経営部市立病院経営改革担当)

【質疑】

(記者) 知識経験者について、具体的に求める人物像があれば教えてください

(市長) 福祉や医療、介護に関わる政策や経営の専門家、子どもの発達に関わる専門家、福祉・介護分野の専門家といった方々を候補として考えていますが、現時点では正式な依頼は行っていません

(記者) 最終的に市長が選任されるのでしょうか

(市長) 庁内で相談しつつ、私のネットワークも活用して適切に人選する予定です

(記者) 何名程度選任される予定でしょうか

(担当) 5 名を予定しています

(記者) 既に目星をつけている候補者もいるのでしょうか

(市長) はい、何名かは考えています

(記者) 懇話会は、知識経験者 5 名と市民公募委員 2 名の計 7 名で構成されるのでしょうか

(市長) はい、そのとおりです

(記者) 市民公募委員の選考方法について教えてください

(担当) テーマに沿った小論文と面接を通して選考します

(記者) 小論文で人数を絞ったうえで面接をするのでしょうか

(担当) いえ、応募者全員に小論文と面接をセットで受けていただきます

(記者) 懇話会の活動頻度はどの程度でしょうか

(担当) 検討状況にもよりますが、当初は 2 か月に 1 回程度を想定しており、その後は状況に応じて調整できればと考えています

(記者) 市民公募委員の求める人物像を教えてください

(市長) 行政に都合の良い方ではなく、関心を持って積極的に意見を述べていただける方がいいと思います。したがって、小論文や面接でその人の思いや考えを表現していただきたいと考えています

(記者) 小論文のテーマを教えてください

(担当) 「あなたが印象に残っている医療・福祉・介護・保健に関する経験と感じたこと(課題など)」について」です

(記者) 医師や看護師の方を想定されているのでしょうか

(担当) いえ、そのようなこだわりはありません

(記者) 市民公募委員について、市議会議員や市職員でも応募できるのでしょうか

(担当) 市で定めている審議会の市民公募委員の募集にあたってのルールに則り、市議会議員や職員、他の審議会の委員は応募できません

(記者) 選任にあたり、ジェンダーバランスも考慮されるのでしょうか

(市長) 可能な限り配慮したいとは思いますが、ジェンダーだけでなく年齢など多様な方々に来ていただきたいと考えています。ただ、メンバーは7名ですので、どこまでできるかというところはあると思います

(記者) たからづかモデルの建物統合について、市立病院の建て替えと同時に設けられる施設という理解でよろしいでしょうか

(市長) そこも含めて検討したいと考えています。市立病院の建て替え後、病院の残りをどう活用するかや、どのような施設が近接していたほうがいいのかということも含めて検討していきたいと思っています

(記者) 既存の健康センターやステップハウス、国民健康保険診療所などの施設の活用も踏まえて検討されるということですね

(市長) そうですね。国民健康保険診療所は西谷にありますので、動かすことは難しいと思っています。ただし、施設の連携を考える際には、これまでの機能をそのままにするのか、新しい機能を持たせるのか、整理が必要かといった点も含めて検討したいと考えています

(記者) たからづかモデルのように、医療・福祉・介護・保健を一体化した取り組みは、他の自治体で先行事例があるのでしょうか

(市長) それぞれの施設間では事例があると思います。例えば健康センターでは、検診機能を持つ施設がある病院は民間にも多くあります。子ども発達支援センターについても、多くのこども病院では類似機能がありますが、子ども発達支援センターという概念自体はまだあまり確立されていないと認識しています。ステップハウスに関しては、多くの民間病院で老人保健施設などと一緒に運営されている事例もあります。国民健康保険診療所については、僻地の都道府県や市区町村に多数あり、私が以前勤めていた病院でも、病院と診療所の経営が統合されたという事例がありました。したがって、それぞれにモデルがないわけではありませんが、今回のように様々な施設を複合的に考える取り組みは、日本では前例がないのではないかと思います

(記者) つまり、個々の分野では前例があるが、全分野を一体とした取り組みとしては、宝塚市が先進しているということですね

(市長) そのように認識しています

(記者) 市民公募委員について、どの程度の応募を想定されていますか

(担当) できるだけ多くの方に応募していただきたいと考えています

(記者) 委員の募集において、小論文を用いることは一般的なのでしょうか

(担当) そのように認識しています

(記者) 懇話会で出た意見に拘束力はあるのでしょうか

(市長) 拘束力はありません。あくまでご意見を伺う場となります

(記者) 庁内検討会と懇話会がある中で、それぞれ出た意見を踏まえて、最終的に誰がどのような形で結論を出すのでしょうか

(市長) 市長である私が最終責任者として、予算案やデザインといったことも含めて市議会にお諮りさせていただくものと考えています

(記者) いつ頃に結論が出ると見込んでいるのでしょうか

(担当) 検討は2つのフェーズに分かれます。1つは新病院建設に関わる部分で、これは早急に結論を出します。もう1つはエリア全体の将来構想で、こちらは時間をかけて課題を整理しながら進めていきたいと考えています

(記者) つまり、前者はあまり時間がないということですね

(担当) はい、そのとおりです

(記者) 市民公募委員の任期は2年ということですので、おおよそそのくらいを目途にされるのでしょうか

(担当) いえ、もっと短い期間で結論を出したいと考えています

(記者) たからづかモデルは市長の公約の中でも最重要と位置付けていると思いますが、この件について今の市長の考えをお聞かせください

(市長) 私の頭の中には一定の考えがありますが、現実的にどこまでできるのか、また専門家の視点で患者さんや利用者にとって良質なサービスとなるのか、という点はしっかり議論すべきだと思います。したがって、懇話会や庁内検討会で意見を交わすことは重要なプロセスであり、その中で方向性が変わることもやぶさかではありません。それぞれにこだわりはありますが、専門家、市役所職員、市民、それぞれとの対話を通じて現実化していくものだと考えています。なお、市民と市長の対話ひろばの8月のテーマは「市立病院の建て替えについて」を予定しています

(記者) 今後、暗礁に乗り上げることもあるかと思いますが、市長がリーダーシップをとって進めていくことを市民の皆さんは期待していると思いますが、いかがですか

(市長) もちろん強い覚悟を持って、私自身の思いをぶつけていきたいと思っています。様々な課題は出てくるとは思いますが、解決に向けて進めていきたいです

(記者) 市長はイギリスのブレア政権時に医療改革に携わっていたと思いますが、ブレア政権の手法を今回の取り組みに取り入れる考えはあるのでしょうか

(市長) それもあり得ると思います。現在の医療や介護も、介護保険制度の導入以降、民と公のどちらかに明確に分けられない中間的なあり方が求められていると思います。特に医療、福祉、介護、保健の分野では、昔から「民間主導で提供されるべきか」「社会的サービスとして提供されるべきか」という二律背反の議論が続いてきました。ブレア政権の改革は、このような対立に白黒つけるのではなく、その中間的な解決策を模索するものでした。こうした考え方は、現在の医療、福祉、介護、保健の分野にも通じるテーマであり、私自身のイギリスでの経験も活かして取り組んでいきたいと考えています

(記者) 市民や専門家が参画する懇話会で出た意見を政策に取り入れるという手法は、ブレア政権でも用いられていたのでしょうか

(市長) はい、一つの形としてありました。ただ、今回はそれだけでなく、8月の市民と市長の対話ひろばでも意見を広く伺います。つまり、懇話会だけで市民の声を聞いたということではなく、複数のチャンネルを通して市民の皆さんの声を聞きつつ、決断をしていくという建て付けになっています

(記者) 仮に懇話会の中で市立病院の建て替えに反対意見が多数出た場合、白紙に戻る可能性はあるのでしょうか

(市長) 可能性がないとは言えませんが、そういった意見が出た場合には、その背景にある問題意識や課題意識を掘り下げられることが懇話会のメリットだと考えていますので、そのようなところも踏まえて解決策を検討したいと思います

(記者) 懇話会について、報道機関による傍聴や取材は可能でしょうか

(担当) 個人情報の有無など、議事の内容によっては非公開とする場合もあります。公開・非公開の決定フローや、傍聴手続き、取材申し込みの方法などを整理し、整い次第、懇話会の開催と合わせて改めて記者発表いたします

(3) 中学校の部活動の地域移行に向けて地域クラブの活動団体・指導者などを募集

(学校教育課)

【質疑】

(記者) 元プロ野球選手から指導者の応募があったということですが、その方の名前を教えてくださいませんか

(担当) 本人に確認が取れていないため、現時点では公表できません

(記者) 他にも元プロの選手はいるのでしょうか

(担当) 男子バレーについてですが、東京五輪で強化本部長を務められ、その前はサントリーサンバーズの監督としてVリーグで5連覇を達成された鳥羽さんから「今はバレーの活動をしていないので、ぜひ地域貢献したい」と申し入れがあり、男子バレー部を立ち上げています

(記者) 宝塚市は中学校単位での活動が中心ということですが、複数の中学校区で活動する場合もあるのでしょうか

(担当) むしろ単独の学校だけで活動することは難しいため、複数の学校でチームを構成する形になります

(記者) 人材バンクの応募状況はいかがでしょうか

(担当) 募集はこれからになります

(記者) 募集自体はまだだが、問い合わせを多数受けているということですね

(担当) はい、そのとおりです

(記者) 宝塚市の取り組みにおいて、他市との違いはありますか

(担当) 地域移行後も、これまでの部活動の形態をできる限り継続できる環境を整備している点です。教員が指導や運営に関わるチームが多いのも特徴です

(記者) 働き方改革が進められている中でも、部活動に関わりたいという教員は多いのでしょうか

(担当) 全体で「今後も関わりたい」と回答した教員の割合は12%でした。積極的に申し出ている教員はいるものの1人では運営できませんので、地域団体と連携して運営団体を結成していくということになります

(記者) 12%という数字は予想以上ですか、以下ですか

(担当) 20~30%程度を想定していましたので、予想よりは少ない印象です

(記者) つまり、部活動を負担に感じていた教員はたくさんいるということなのでしょうか

(担当) アンケート結果を見ると、そうですね。一方で、教員による地域団体がいくつか目処が立ってくると、今までやらないと言っていた教員から「話を聞か

せてほしい」「相談に乗ってほしい」という申し出も受けていますので、教員によるクラブチームはもう少し増えていくのではと考えています

(記者) 100%は関われないが、少しだけなら手伝いたいというケースもあるのでしょうか

(担当) はい、主たる運営者が別の教員でいるのであれば、自分は支援者という立場でそこに加わりたいという教員もいますし、あるいは他の教員がやっているのを見て、自分もやってみようかなという相談も実際に受けています

(記者) 部活動の地域移行によって、これまではなかった「文化」や「音楽」など宝塚市ならではの新たな地域クラブを創設する考えはありますか

(担当) スポーツは宝塚市スポーツ協会という組織があり窓口が一本化されていますが、文化芸術にはそのような団体がないため、個別に相談して進める必要があります。その中で、スポーツの目処が一定立ったため、今後は文化系にも力を入れていきます。具体的などころについては、「琴」は寄付を含めた支援の申し入れや、「吹奏楽」は一般の音楽活動をされている方から指導の申し入れがありました。そのほか、これまで部活動としてはなかった「書道」の立ち上げに向けた面談も予定しています。また、スポーツ分野においても、「ビリヤード」や「テコンドー」、「少林寺拳法」など、これまでになかった競技にも取り組みを広げています。ほか、「バドミントン」は地域で2団体が活動を開始し、「ダンス」や「クラシックバレエ」、「水泳」、保護者から申し入れがあった「SNS」や「YouTube」に特化した活動への申し入れも受けていますので、そういった分野においても活動を広げていきたいと考えています

(担当) その他にも、「おおぞらへの翼プロジェクト」という、とある小学校のまちづくり協議会から提案を受けた、キャリア教育活動というものもあります。これは、全7回に分けて中学生にさまざまな体験の機会を提供し、一年間を通じて学ぶ取り組みです

(記者) 漫画や演劇、写真などの分野において、宝塚市内には優秀な人材がたくさんいらっしゃると思うので、市から積極的に呼びかけることも有効ではないでしょうか

(担当) 子どもたちからのアンケートでも、これまでになかった種目の要望が寄せられていますので、そこも踏まえて進めていきたいです。また、「漫画」については、宝塚市在住で新聞の4コマ漫画を長年連載されていた方から指導の申し出がありました。ただし、ご高齢のためどこまでできるかは未定ですが、こうした活動も広げていきます

(担当) また、昨年度に続き、今年度も子どもたちへのアンケートの実施を予定しています。秋には活動団体の二次募集を予定していますので、その結果を踏まえて、子どもたちの希望に応えられるよう、進めていきたいと考えています

(記者) 今まで市内には「テコンドー部」はなかったということですね

(担当) はい、そのとおりです

(記者) テコンドーを指導したいと申し入れがあったということですが、テコンドーには2つの流派があり、そのどちらか分かりますか。1つはオリンピックの競技になっているものですが

(担当) おそらく、そちらの方だったかと思います

(担当) ちなみに、「バク転部」を立ち上げたいという申し出もあります。公募前の段階で、市の取り組みを耳にされた方々から、さまざまな提案が寄せられており、「ピラティス」や「ヨガ」、「料理」、「囲碁」なども指導したいという声が上がっています

(記者) 団体数について、完全移行後は増える見込みでしょうか、それとも減る可能性があるのでしょうか

(担当) 現在、市内には138の部活動があります。現時点で活動が確定しているのは44団体ですが、これから公募や協議を進めていき、最終的には138に近づきたいと考えています

(記者) 種類は増えるのでしょうか

(担当) 種類はかなり増えるの見込んでいます

(記者) 種類は増えるが、数は138を下回る見込みということでしょうか

(担当) 他市では応募が多数あったと聞いております。本市においても、広報誌のほか市ホームページなどでも募集していますので、市内だけでなく市外の方からの応募もかなりあるの見込んでいます。したがって、138団体を目標にしていますが、達成もしくは超えるの見込んでいます

(次頁あり)

2 その他

【質疑】

（記者）旧安田邸の建物の無償譲渡が議会で認められたと思います。まず、旧安田邸の建物について、市長の評価をお聞かせください

（市長）大正時代に建てられた旧安田邸は、北米形式の民間住宅が日本人の解釈で建てられた黎明期の建築物であり、歴史的な意義が大きいと考えています。また、雲雀丘花屋敷の住宅街の中でも特に趣向を凝らした住宅であり、駅から非常に近いという立地も含め、地域にとって重要な建物です

（記者）市に寄贈されてから長い間、いわゆる塩漬け状態にありましたが、今回、（株）古美術永澤が譲渡を受けたことを踏まえて、今後に対する市としての期待をお聞かせください

（市長）期待というよりも、まずは感謝の思いです。財政難の中で、歴史的建造物や町の雰囲気、文化を残したい気持ちはありつつも、断念せざるを得ない状況がありましたので、このような形でご協力いただけたことに感謝しています。また、今後どのように活用し、まちとして盛り上げていくかは、私たちや安田邸プロジェクトが試されている部分です。したがって、（株）古美術永澤と安田邸プロジェクト、そして市役所が一丸となって、「譲渡が決まって良かった」で終わるのではなく、今後のまちづくりや利活用にどう結び付けていくか、知恵を絞っていきたいと考えています。その意味で、期待というよりも課題を与えられたと受け止めています

（記者）市としても今後、安田邸の活用に関与を続けていくのでしょうか

（市長）はい。（株）古美術永澤、安田邸プロジェクト、宝塚市の3者で安田邸の活用方法を考える協定書がありますので、それに基づいて、市としても責任を持って考えていきたいと思っています

（記者）参議院選挙について、宝塚市の特徴として前回の選挙結果と同様の傾向が見られたと思いますが、今回の参議院選挙を市長はどのように見られましたか。また、市長ご自身が何らかの関わりを持たれたのであれば、その点も含めてお聞かせください

（市長）宝塚市内の投票状況は兵庫県全体と完全に一致するわけではありませんが、ご指摘のとおり、従来の各政党の支持構図は大きくは変わっていない部分もあると思います。一方で、全国的にも、あるいは兵庫県においても新しい政治の動きが見られました。参政党の台頭や既存政党への支持率低下が特徴的でした

が、これは今回に始まった現象ではなく、過去 5 年から 10 年の間に徐々に顕在化してきた傾向だと考えています。既存政党の枠組みでは自分たちの意見が反映されないと感じる市民の声が大きくなり、そうした不満を受け止める政党が生まれては消えることを繰り返してきた結果、今回は参政党や国民民主党が支持を得たのだと思います。

私自身は議会でも申し上げた通り、選挙活動には一切関与しておらず、不偏不党の立場で距離を置いていました。当選された方々にはご挨拶しましたが、いづれにしても、どのような方であっても必要に応じて連携できればと考えつつ、一定の距離を保って見守っていました。

また、私は政治家として、保守やリベラルといった枠組みにとらわれず、対話を重ねたうえで決断する「新しい中道」の在り方を大切にしています。今後は、国政においても市議会においても、流動的な状況が続くのではないかと考えています

（記者）参政党について、兵庫県では議席を獲得しなかったものの、特に尼崎市などで得票が多かった印象です。この現象をどのように捉えていますか

（市長）既存の政党の枠組みから見て参政党はけしからんという話ではなくて、今回、支持を得た要因として、例えば外国人の排斥など、これまでのオーソドックスな政策の考え方からすると、異端とも捉えられるような政策が評価された部分については、必ずしもそれを完全に否定するのではなくて、市民の皆さんの中に、一定の大きな不安のようなものがあるのだらうと思っています。私から見ると、「不満」というよりは「不安」だと思います。

さまざまな国や日本社会において外国人が増えてきたのも事実ですが、一方で、長らく経済不況等で市民生活が非常に厳しい状況にあり、先が見えないことへの不安があり、そういった不安があのような形で吸い上げられたのかなと思います。そこは、単に対話がどうこうという話ではなくて、日本の国全体、あるいは社会、制度として、拾いきれていないものがあるのだらうということは意識しています。ただ、それが今後どうなっていくのかは、ちょっとわからないともっています。

参政党の政策を深く分析しても、いろいろ変遷している部分もありますし、一貫していないところもありますので、細かく分析しても違うのかなと思います。ただ、得も言えぬ市民の皆さん、つまり市井に生きる人々に不安があって、それが政治的な活動をしている一定のグループとの間に距離感がある。今の既存の政党の枠組みの中では、その不安が受け止められていないという不満

が一定程度あるだろう、ということは理解できますし、それは現象として大事なことだと思います。

それが、できれば分断ではなく、対話の中、あるいは政策の中で実現できればいいのですが、正直なところ、市政の中で実現できる部分は少ないのかなとも思っています。ですので、私自身としては、少し憂慮を持って見えています

（記者）芦屋市の高島市長が、今回の参院選において SNS で積極的に発信されていましたが、森市長はご自身の考えなどを発信するお考えはありませんでしたか

（市長）正直どうしようかなと思ったのですが、先ほど申し上げたような分析が自分の中にはありました。今回の選挙での動きは参政党だけではなくて、立憲民主党の議席数は変わらなかったものの、国民民主党が増えたということは、ある意味予測されたことではありました。また、共産党や公明党がそこまで振るわなかった一方で、れいわ新選組が増えたとか、そういう様々な細かい動きもあったのかなと。

イデオロギーの軸で言えば、それぞれ異なっているけど、既存の政党への不満というものは感じていました。ただ、私自身は議会でも申し上げましたが、選挙活動には一定の距離を保持しようと思っていましたので、選挙期間中に思うことはいろいろありましたが、発信することはむしろ避けようと考えていました。

昨日、高島市長ともお話をしたのですが、それぞれの市長さんにお考えはあると思います。ただ、先ほども申し上げたように、現実的に目の前にある選挙にどう関わるかというよりも、日本社会として、あるいは宝塚市として、市民の皆さんがどのようなことを考えているのかということに対して、何らかの形でレスポンスはした方がいいのかなと、今も考えているところです。

もし私が何かを発信するのであれば、既存の政党の枠組みに対する不満や、生活や社会の将来に対する不安など、市民の皆さんが抱える思いに対するものになると思います。そうした中で、私自身の見方としては、多くの人は特定の政党に固まっているというよりも、自分たちの不安に応えてくれる存在をまだ模索している段階なのだと感じています。たとえば今回の選挙では参政党への支持という形で現れましたが、過去5年を見ても、様々な政党が出てきていますので。

私は選挙で戦ったときと変わらず、やはり真の中道、つまり対話と決断というところが、自分としては求められているのだろうと思っています。今でも自分が政治家だとはあまり思っていませんが、政策的な枠組みとしての自分の立ち位置は、今回の結果を受けて、より確信を持ったといいますか、進むべき道と

してはそうだなと感じています

（記者）今回の参議院選挙を通して、市長ご自身が「国政に挑戦したい」という気持ちが芽生えることはありましたか

（担当）全くありません。私の頭の中は、宝塚市のことでいっぱいですので

以上